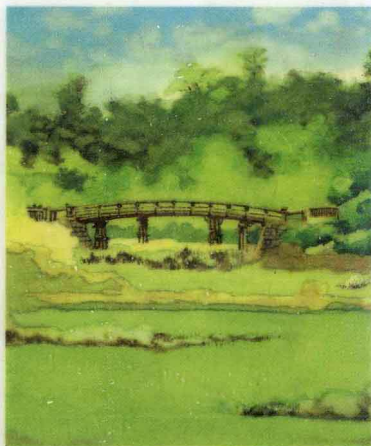


探偵クラブ
detective club collection

勇士カリガッチ博士

三橋一夫



国書刊行会

偵クラブ
detective club collection

勇士カリガチ博士

三橋一夫



国書刊行会

探偵クラブ

勇士カリガッチ博士

一九九二年六月二〇日初版第一刷印刷

一九九二年六月二五日初版第一刷発行

著 者 三橋一夫

装 幀 高麗隆彦

発行者 佐藤今朝夫

発行所 株式会社国書刊行会

東京都豊島区巢鴨三―五―一八

電話〇三(三九一七)八二八七 振替東京五―六五二〇九

印刷 株式会社キャプス・セイユウ写真印刷株式会社

製 本 大口製本印刷株式会社

ISBN4-336-03362-5 © Kazuo Mituhashi 1992

勇士カリガッチ博士 目次

腹話術師

7

白鷺魔女

18

空袋男

37

親友トクロポント氏

47

島底

72

久遠寺の木像

86

鏡のなかの人生

103

招く不思議な木

130

夢

165

秋
風

174

ばおぶの森の彼方

179

勇士カリガッチ博士

202

怪獣YUME

233

鬼の末裔

246

角
姫

276

不思議作家の不思議人生

東
雅夫

307

勇士カリガッチ博士

腹話術師

それは、実に奇妙な男であつた。

デップリした四十五、六の男で、派手な荒い格子縞の服、まがい物らしい、馬鹿に大きな宝石入りのネクタイピン、厚い胸には太い金鎖、ぷっくり肥えた両手の指には、三つも指環を光らせていた。頭髮は奇麗になでつけ、額は広く、首は太短く、鼻の孔がバカに大きいくせに、口だけは妙に女のようにつぼめて、黙りこくっていた。一眼で伊太利^{イタリヤ}人の芸人と知れるこの男は、途中から私の車室に入つて来たのだが、流行雑誌と新聞に読みふけり、私の方を見ようとしなかった。

私の車室には先刻から、私の他にその男がいるばかりであつた。

西暦一九三一年（昭和六年）の夏のこと、私が伊太利のミラノから南仏ニースに行つたことがある。その途中、汽車の中での話である。

私は私で、わざわざ故国から持つて来た萩原朔太郎の詩集を開いていたおかげで、想いは遠く故国

の裏町をさまよっていたから、奇妙な声が聞えるまでは、その男にろくに注意も払わなかった。

「ニースへは、あと、どのくらいでしょうかね？」

男は、上げた雑誌の上から、大きな——少々トロンとした眼だけを出して、仏蘭西語で話しかけた。私が最初驚いたのはその声であつた。この車室には私の他にはこの男だけなのだから、すぐに声の主はこの男と解つたようなものの、その声はどこか遠くの方から聞えて来たようでもあるし、或いはすぐ私の耳元でしたようにも聞えた。少くとも、その男の坐っている方向から聞えて来たとは思われなかった。何か、違つた世界の声——そんな感じがした。

余り不意だったので、私はハツとして、その男を見ると、雑誌の上の、返事を待っているような男の眼とぶつかった。

「そうですね」私は、腕時計を見て答えた。

「あと一時間ほどです」

「有難う」男は雑誌を口のとこに当てたまま、例の奇妙な含み声で言った。

「貴方はスペインの方ですか？」

その様子は、何か、婦人が恥しがってでもいる時のようで、私には、薄気味悪く思えた。

「いえ、日本人です」私は、無愛想に答えた。

「ほう、日本人？」男は好奇心に眼を輝かせて身を乗り出した。

それから、その男は「日本は良い国か」とか「気候は暑いか」とか「病院はあるか」とか「汽車はあるか」などと、くだらないことを山ほど訊ねて私を困らせた。

私は日本には何でもあること、日本が風光の美しい国であること、今頃は、螢や風鈴や金魚を売る男達が、静かに柳の垂れた小路を歩るいているのだと話した。蛇の目傘や寿司や濱島田や竹の縁台のことを話した。それから、礼儀として、

「貴方は、伊太利の方でしょう」と訊ねた。

「そうです。腹話術師でニースの寄席に出るために招ばれて行くところです」と、その男は答えてから、

「で、貴方の御商売は？」と私に訊ねた。

「僕ですか？」私は考えながら言った。

「僕は将来、小説家になりたいと思っています」

「ほう、小説家に……」男は大きな眼を益々大袈裟に見開いて、

「それでは」と思案するように、言葉を切りながら、

「私の不思議な身の上話を、お聞かせしましょうか、簡単に。小説の種にでもなるかもしれませんが」と言った。

汽車がニースに近づくにつれて、紫外線は益々強烈になり、空はコバルトに海はいよいよ冴えたブルーに、燃えるような赤褐色の山膚の所々に淡緑色の樹々が茂り、白壁赤屋根の人家が点々と連なっていた。全欧州の富豪達の避暑地、ニースは、眼ざめるような強烈な光線の下に、静かに私を待っていてくれるように思えた。全く、トンネルを一つ出るたびに紫外線は眼に見えて強くなつて来るようであつた。

私は——と、その男は雑誌を筒のように巻き、それで、口を押さえるようにして例の奇妙な含み声で話しはじめた——私はゼノアから一時間ばかりの片田舎で生れました。商売は親の代からの肉屋でした。つまり、牛や豚や鶏の肉に腸詰め、バターや粉チーズの他に、スパゲティや色んな瓶詰類を売っていました。

両親が死ぬと、若い私はたった一人で商売をやっていました。小さい村のことですから別に競争相手があるわけではなし、万事親父の代と同じに、うまくいっておりました。が、正直のところ私は余り村の者達からよく思われてはいませんでした。

そのころの私は、お饒舌りの飲んだくれで、腕自慢の喧嘩好きでしたからね。今考えると全く辱かしくなります。

同じお饒舌りでも、罪のない、呑気なことをよく饒舌る、雑談好きの、聴手を喜ばせたり笑わせたりする人がありますがね、私のは違ひです。いわば、議論好きなんです。何にも解りもしない癖に、悪口をいったり、陰口をきいたり、聴手にえらそうに説教したりする有様でした。

学問がない上に、年中大酒を飲んでから、のべつ幕なしにこんなふうにお饒舌りつづける、罵りつづける。そして、拳句の果ては喧嘩です。

こんなふうでしたから、女に好かれる筈はありません。私の幼友達で、ずーと私が恋しつづけて来た娘が私を袖にして、他の男のところへ嫁に行ってしまった。春のことでした。

そこでヤケ酒というわけです。村の酒場で大いに飲んで、そこで私は、大声を張り上げて、相手の男とその女の悪口を喚きつづけました。もう私の乱暴は誰れも知っていますから、相手になるものな

どはおりません。

私は酒場を出ると、新婚夫婦の新居——その男は靴屋だったのですが、その新居の外へ行つて、寝室とおぼしき二階の窓硝子に石をぶつつけて、上手く割りました。

乱暴という奴は不思議なもので、一つ乱暴なことをすると、次ぎから次ぎへと乱暴なことがしたくなるもんです。貴方はそんなことを経験なすつたことは無いでしょうが——全く、そういったもんですよ。

その夜も私は、新婚夫婦の寝室の窓硝子を割ると、すっかり浮々した乱暴な気持ちになり、牛乳屋の驢馬小屋に、石をたたき込むやら、立木の枝を折つて、その枝で幹をぶん撲るやら、大変な乱暴をやりました。

私は散々乱暴をした挙句、ただ一人で、村の背後にある丘のところへやつて来ました。そこは子供の頃からよく遊びに来たところで、葡萄の樹が多く、私も小さい時はよく採りに行つたものでしたよ。そこには昔から大理石の彫像が一つ建つてゐるのですが、それは古代ギリシャの拳闘士の像で、左手の拳を頭の上に右手の拳は腰に当てて、へんてこな構えをしているんです。誰が作つたものですか、余程古いものらしく、私の祖父の代にも其処に在つたそうで、その像の由来なんか村の者は誰れも知りませんし、知ろうともしませんでした。

その夜、散々あばれ廻つた私は、丁度この像の前に来ました。今までも、酔つて乱暴した後にはよく其処で一憩みしたものでした。というのは、そこに泉があつたからで、その水を飲み、頭や顔を冷やして、澄んだ夜空を眺めていると、乱暴した後ほど、悔恨というか——何かこう甘つたるいセンチ

メンタルな気持ちになつて、「何と俺という男はこう馬鹿なんだろう」などと考えて、一人で涙なんか流すのでした。それが又、何とも言えぬ良い気持ちなので……。

それで、その夜も無意識に其処へやつて来たものと見えます。ところが、その夜は、普段の夜とは違いました。失恋のヤケ酒ときていますから、いつものような気持ちにはなりません。一方の気持ち

が、
「ああ、喉が乾いた！ 水を飲もうかな」といいますと、他の一方が、

「嫌なこった！ 誰がこんな水なんか飲んでやるもんか。酔いを醒ますのなんか、嫌だ！ 嫌だ！ 嫌だ！」こんなあんばいでした。

そこで、私が、どうしたとお思ひになります？ 私はその大理石の拳闘士に散々悪態をつきました。それから唾を吐きかけました。

「南瓜野郎！ 変な恰好しやつて、威張つていくさる。この兵六玉ひようろくだまのボケナス野郎！」といった具合でさ。

そのへんで止しよにして、帰れば良かったのですが、春月の光りで真白に輝やいている大理石像の傍そばへやつて行つて、その顔をイヤという程ひつぱたこうとしました。

私が平手を振りあげたその時、大理石像が低い声で、

「お饒舌りめ！」と呟くようにいうと、腰のところに構えていた右の握り拳を、矢庭にぐーっと延ばして、私の口を、大きな拳を開き、怖ろしい力で引摺み、ぐいと引きむしりとして、再び元の構えに返りました。

それが余りに突然だったので、一瞬、茫然としていましたが、ハッと我れに返えると、急いで自分の口のところに手をやってみました。が、もう私の口はありませんでした。鼻の下が、すぐに頤^{あご}になつていたので。驚いて、声を出そうとしましたが、声も出ません。

奴を見ると、以前通り左拳を頭上に、右拳を腰に、月の光で真白に輝きながら、冷たく突つ立っています。

もう私は夢中になって、奴の腰に構えている右拳にとびつき、固く握っている拳を拡げて、私の口を取り戻そうとしました。しかし、拳の中に私の口を握り込んでいることはよく解っているのですが、もう石像は以前通りの、さっぱり動かない、コチコチの大理石にかえつて、百年來変らぬ恰好で、向うの梢の方を白い眼をして睨^{にら}んでいるじゃありませんか。私は泣きながら、

「どうか、俺の口を返えして下され。そうすれば、もう決して悪態をついたりはしないから」と頼みました。声が出ないので、心の中でこう繰返えし、鼻をならし、涙を流し、膝について頼みました。

しかし、奴はもう再び動こうとしません。そんなことを繰返えしているうちに朝になりましたので、私は泣く泣く自宅へ帰りました。

私は夢ではないかと、帰^{かえ}り途^{みち}じゆう考えて、どうか夢であるようにと祈りましたが、帰宅して、自室の鏡に顔を映してみても、はつきりと自分には口が無くなったことを知りました。口がなくなつて、私が最初一番困ったことは物を食うことでした。はじめは余りの哀しさのために食欲も起きませんでした。二、三日すると腹が空いて我慢が出来なくなってきました。そこで、鼻から牛乳を吸い込んでみました。はじめは鼻の中がピリピリするし、頭がズーンと痛くなつたりして、苦痛でしたが、

追々に上手になり、牛乳やスープは平気で飲めるようになりました。

その間、私は口が無くなった恥しさに、怪我をしたといつて、マスクで口を覆い、話は手帳に書いて用を足しました。しかし、そのうち、鼻からパンとか、スパゲティとか、卵というような柔いものが食べられるようになった頃には、言葉のほうも、いくぶん鼻声ながら簡単な会話なら結構出来るようになりました。丁度、口のある人が口を閉じて、ものを言う時のような具合にです。その頃にはもうマスクをとっておりましたが、ただ、鼻から直ぐに頤きでは恰好が悪るので、もと口のあったところに女の口紅で唇の形を画かきました。

赤ん坊の柔らかな足の裏も、しまいには大人の足の裏のように、剃刀でけずっても、血も出ないようになるでしょう。そんな具合に、私の鼻も段々固いものに馴れて、一年もすると、鶏のカツレツでも、ビーフステーキでも、野菜サラダでも、何一つ不自由なく食べられるようになりました。

その頃になると、私は腹で話をするこつを覚えました。もう鼻声ではありません。はつきりした、今、貴方がお聞きになっているような声です。二、三年すると、お饒舌りしようと思えば、昔通りに出来、大声をあげようと思えば、それも出来るようになりました。

その間も私は、生きて行くために肉屋の商売はつづけていました。私の恋人だった人は、子供が三人も出来、私の店の前などもよく通りましたが、私はもうそんなことに構っている暇はありませんでした。冷淡になったのではありませんが、自分の商売と、鼻から食べる方法と、腹話の練習で無我夢中でしたからね。

そして五年程の間に、私はやっと今のような自分になれたのです。やっと、本当の一人前になれた